学環学府

Interfaculty Initiative in Information Studies
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies
The University of Tokyo

number. 27

Gakkan Gakufu

Interview

GAKKAN GAKUFU

Interfaculty Initiative in Information Studies/Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

丹羽美之准教授 インタビュー

テレビ番組の財産目録を作る!

「カッコいい話は何もないんですよ」「これ使えないでしょ」と自らツッコミを入れながら軽い口調で語られるお話は、実は深い見識であふれていました。紙面には納まりきりませんがそのエッセンスだけでもご紹介できたら幸いです。

NHKを経て研究の道に入られたそうですね

NHKに勤めていたといっても1年3ヶ月です。それでも規模が小さい地方局勤務だったので何でも一通りやりました。ドキュメンタリーやニュースのレポートから、温泉街の湯けむり生中継まで(笑)。このときテレビの取材や演出の方法を体で覚えたのは大きかったですね。1年間お給料をもらいながら、フィールドワークをさせてもらったようなものです。

大学院に入ってからは、倉庫の奥で埃をかぶっているような古いドキュメンタリー番組をひたすら見続けました。いまのようにテレビ番組のアーカイブが整備されていなかったので、昔の番組を見るのにとても苦労しました。制作者の方々に手紙を書き、自宅まで会いに行って、見せてもらったりもしました。当時、自分の周りの院生でテレビを研究している人はほとんどいませんでした。これからはケータイやインターネットだ、テレビはもう古い、と。いま考えてみれば、それがよかった。テレビを歴史として研究し始めた最初の世代だと思います。

いまの目標はテレビ番組の財産目録を作ること。この秋からNHKの放送文化研究所と共同でテレビ·ドキュメンタリーの研究会をはじめました。テレビでこれまでどんなドキュメンタリー番組が作られてきたのかをまとめる作業に取り組んでいます。この半世紀あまりの間に、テレビは多くの知的成果を蓄積してきました。しかし私たちはその成果をきちんと継承できていない。テレビ番組の財産目録があれば、私たちがテレビやメディアについて考えるための手引きになるだけでなく、戦後史や現代史について学ぶための絶好の教材になるはずです。

雑誌の編集もされているそうですが

放送批評懇談会というNPOが出している『GALAC』という雑誌の編集長をしています。これは放送を批評する雑誌で、ジャーナリストや制作者、研究者や評論家を中心に読まれています。ドラマやバラエティから、報道やニュースまで、放送文化や放送ジャーナリズムにこだわって、毎号特集を組んでいます。最新の11月号では「こんな生番組が見たい!」という特集を組みました。最近の生番組は全然面白くないので、みんなでどうしたらいいか考えようという企画です。発行部数は4000部程度ですが、表紙をジャニーズのタレントにしたりすると、ファンが殺到してバーンと3倍ぐらい売れたりします(笑)。

放送批評懇談会はこの雑誌の他に、年に一回、優れたテレビ番組を表彰する「ギャラクシー賞」を主催しています。こうした活動は研究の成果を現代のテレビの現場にフィードバックするための実践だと考えています。自分のやっている研究が、現在のテレビや、日々現場で仕事をしているジャーナリストや作り手たちが抱える様々な問題とつながっていることを実感できます。月刊誌の編集は正直言って大変ですが、楽しいですよ。

記録映画のアーカイブにも関わっていますね

はい。気がついたら、いつの間にかテレビだけでなく映画の世界にも足を踏み入れていました。散逸や消失の危機にある記録映画を集めて、研究や教育に活用できるようにするために、昨年、記録映画アーカイブ·プロジェクトを立ち上げました。

戦前·戦後の日本では、ニュース映画やPR映画、科学映画や教育映画など、たくさんの貴重な記録映画が製作されました。しかしフィルムがビデオになり、デジタルになり、という過程で、多くの記録映画会社は解散したり、倒産してなくなっていきました。いま現像所の倉庫には、引き取り手のいなくなったフィルムが数多く眠っています。これらは放っておけば、いずれ廃棄されたり、散逸してしまいます。そこで、研究者や製作者、現像所やアーカイブの関係者が集まって、これらのフィルムを保護し、研究や教育に広く使えるようにしようというプロジェクトを立ち上げました。

いまそのモデルケースとして、岩波映画約4000本のアーカイブ化に取り組んでいます。岩波映画製作所は、戦後日本を代表する記録映画会社です。戦後復興期から高度経済成長期にかけて、数多くの科学映画や産業PR映画、教育映画を作りました。羽仁進や黒木和雄、土本典昭や小川紳介もここから育ちました。記録映画というと地味に思うかもしれませんが、改めて見直してみるとこれがとても面白い。戦後日本の産業、科学技術、社会、文化を記録した一級の映像資料です。

この春からは、記録映画を上映する定期的なワークショップもはじめました。毎回、製作者や研究者など多彩なゲストを招いて、実際の映像を見ながら、記録映画の歴史を振り返っています。次回は10月18日、岩波の科学映画を特集します。丁寧に作られた科学映画の魅力に触れることができます。映画を使った理科の体験授業などもあります。ぜひご参加ください。

詳しくは

http://www.kirokueiga-archive.com/event/index.html

「メディア・アートとは何か?」開催

7月25日、情報学環主催×東京藝術大学大学院映像研究科共催のシンポジウム「メディア・アートとは何か?」が福武ラーニングシアターにおいて開催された。

第一部「『不完全な現実』をめぐって」では、まず、石田英敬学環長が、メディア・アートをめぐる議論の混迷を指摘、芸術的創造のための批判的知性の必要性を訴えた。続いて、世界的なメディア・アーティストで東京藝大映像研究科長の藤幡正樹氏が、人間存在とメディア・コンディション、メディア・コンシャスの必要性をめぐって批判的に制作してきた作品や著書の問題系を拡張するかたちで、メディア・アートの表現の地平、主題や射程を原理的に問い、その再定義へ向けた問題提起を行った。

第二部「〈メディア〉×〈アート〉」では、詩人・美術批評家で国立国際美術館長の建畠晢氏を迎え、石田英敬教授、藤幡正樹教授の三氏による徹底討議が行われた(司会:詩人・松井茂氏)。メディア・アートの創造行為や批評実践の在り方から、展示空間のデザイン、家電やアキバの問題まで、幅広い議論が交わされ、現代社会と芸術を取り巻くクリティカル・ポイントが浮き彫りにされた。

この討議には、本学名誉教授で元学環長の原島博氏、IAMAS名誉教授の坂根厳夫氏、美学者の吉岡洋氏、メディア・アーティストの三輪眞弘氏をはじめ、様々な方に参加いただくことで、大変重要な批評空間を構築することができた。会場は、250名を超えるオーディエンスで埋め尽くされ、数多くの方から貴重な意見が寄せられ、シンポジウムは大好評のうちに幕を閉じた。

今後、情報学環と東京藝大映像研究科では、これを機にして、メディアとアートをめぐる連続シンポジウムを開催していく予定である。(石田研D4・中路武士)

Happy Hour

Happy Hourとは、福武ホールのテラスにて月に一度開催されているカフェイベントです。学環の学生や教員が、コースや研究室の垣根を越えて交流出来る場をつくることを目的に、これまで2008年5月から通算12回、実施しています。

学環では、入学した当初は、他のコースの学生と交流する機会が多少はありますが、次第に他のコースとの接点はなくなってしまいます。せっかく「面白い人間」が多く集まっている組織なのに、これは非常にもったいないことです。

一方で、ある海外の大学では、夕方になるとお酒を片手に、屋外で学生や教員が気軽に議論や交流ができるHappyHourというイベントがあるということを知りました。こうした「場」が、学環にも必要だと考え、スタートしたのが私たちの活動です。

Happy Hourで生まれる会話は、ただ楽しいだけではありません。自分の「興味・関心」や「研究テーマ」など、普段いる環境では当たり前すぎて喋らないことも、改めて他人に語ってみることで、新しい気づきを得るきっかけにもなっています。

今後は、やはりより多くの方々に参加して頂きたいと考えています。テラスで開催しているのを見かけたら、当日参加も可能ですので是非、気軽にふらりとお立ち寄り頂ければと思います。また、イベントの企画を手伝ってくれる学生や、先生方のご協力も不可欠です。ご興味のある方は是非、お声をおかけ下さい。これからも「学環らしいイベント」をみんなで作っていきたいと考えています。(中原研D1・舘野泰一)

企画・運営

舘野泰一　木村充(中原研 M1)
牧村真帆(山内研 卒業生)　清宮涼(教育部 研究生)
安斎勇樹(山内研 M1)　中原研・山内研・教育部の学生スタッフ

Webサイト

Googleで「HappyHour 情報学環」と検索してください。

問い合わせ先 gakkan.happyhour@gmail.com

東京大学制作展
iii Exhibition
東京大学情報学環・学際情報学府

東京大学制作展は、情報学環・学際情報学府という学際的な組織の中で実際に作品制作とそのプロデュースを行うことで、工学知識と芸術的表現を融合する力の養成を目的としている。これまで表現に関する教育にあまり焦点を当ててこなかった本学において、この取り組みは新たな分野への挑戦といえる。2009年12月には第11回の開催が予定されている。

東京大学制作展とは

東京大学制作展は、学生が日々の研究で培った知識を、メディア・アートというかたちで一般にもわかりやすく表現することを作品制作の目標にしている。制作展は2001年、情報学環・学際情報学府が発足して間もない頃に情報学環が主催し、その後、学生が中心となって開催された催しを前身としている。そして、2004年度より"iii Exhibition"と名前を変え、学際情報学府のカリキュラムの一環として、毎年、夏と冬の2回開催されるようになった。2005年度から2008年度にはコンテンツ創造科学産学連携教育プログラムとの合併授業となり、発表内容が一段と幅広くなるなど、内容の充実と新たな課題への挑戦を重ねながら今日の姿に発展してきた。

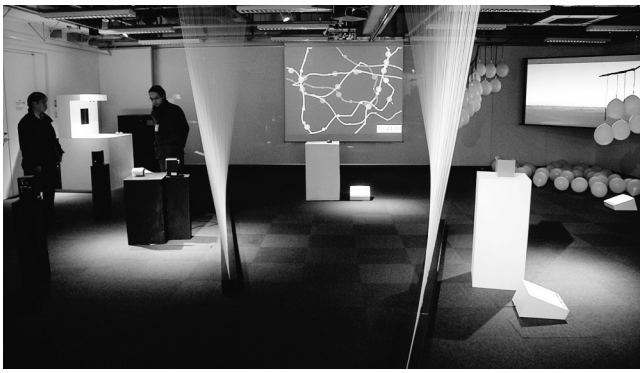
活動内容

a

制作展では、個々の作品制作に加え、会場設計から広報活動までの全ての企画・運営を、授業担当教員の指導のもとに、学生が行っている。授業時間に行う全体ミーティングでは、作品の制作者と教員を含む参加者が作品のコンセプトや技術について意見交換をしたり、各学生が受け持つ係の進捗確認を行う(図a)。運営は、全体を統括する「プロデューサ」を中心に、ポスターやチラシなどを制作する「デザイン」、プレスリリースの実施や展示内容に関するWebページ作成を行う「広報」、会場の作品配置や演出を行う「会場設計」(図b)、活動を記録し目に触れる形でアーカイブ化する「記録」等の係に分かれ行っている。会期中は、説明員を常に配して作品解説やアンケートを行っており、会期初日には各メディア関係者を招きレセプションを実施している。会期後は回収したアンケートを集計し、全体の反省点をまとめることで次回以降の制作展の更なる質の向上を目指している。

作品と主な成果

展示会には、技術・美しさ・楽しさなどを追求した個性豊かな作品が出展されている。作品数は回を重ねるごとに増えており、現在は20点近くとなっている(図c)。来場者数も年々増え、第10回制作展では1000名近くを動員した。また、制作展は国外でも高い評価を受けており、2008年には、オーストリアのリンツで開催されたアルスエレクトロニカにおけるキャンパス展と、台北で開催されたDAICEにおける交流展示という二つの海外における展示機会を得ている(図d)。特に


b

アルスエレクトロニカのキャンパス展では総合大学として初めて東京大学が招待され、展示24作品中、制作展関連作が10点展示された。このように学内外で行われる様々なイベントにも優れた作品が出展され、制作展自体もその評価や注目度を高めている。

次回開催情報

次回2009年冬の制作展は以下の通り開催される。
【主催】東京大学大学院情報学環・学際情報学府
【日時】2009年12月3日～12月8日
【展示場所】東京大学本郷キャンパス内 工学部2号館各所等を予定

「制作展では、東京大学の学生が現在研究している内容や、研究の過程で身につけた技術を『作品』というかたちにし、学内や学会等での専門家に向けた研究発表に終わらせることなく、広く一般の方々に見ていただくことを目的としています。様々な技術をわかりやすく体感できるような作品を数多く展示する予定ですので、是非お誘いあわせの上、お気軽に足を運んでいただければ幸いです。」(東京大学制作展・プロデューサ)

c

c

d

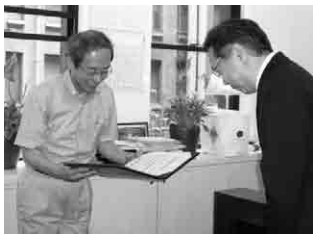
d

修士課程入試合格発表

9月4日、平成22年度修士課程入試最終合格者の発表があった。合格番号はWebでも確認できるため、掲示を見に来る受験生の数は多くはないが、発表の午後2時、掲示場所の学環本館入口付近には落ち着かない表情の人々が集まった。志願者数は昨年より一割以上増加の226名。そのうち84名(社会情報学コース:16名、文化・人間情報学コース:30名、先端表現情報学コース:24名、総合分析情報学コース:14名)の最終合格者が決定した。

原島博元学環長 東京大学名誉教授に

情報学環第二代学環長を務められ、今年3月に定年を迎えられた原島博先生が、その数々のご功績によって東京大学名誉教授の称号を授与された。授賞式は7月17日、学環長室にて行われた。原島先生は小誌創刊時の学環長で、発刊にもご尽力いただいた。記念すべき第一号(2002.冬 Number.ZERO)の巻頭ページは原島先生のインタビュー記事で飾られている。



シンポジウム開催のお知らせ

■「筑紫哲也との対話──没後一周年」
【日時】2009年11月3日(火・祝)
13時~17時30分
【場所】福武ラーニングシアター
【主催】情報学環×朝日新聞社

昨年11月に亡くなった、ジャーナリストの筑紫哲也さんの一周忌を前にしてシンポジウムが開催される。「第一部:政治とジャーナリズムの転換点で」「第二部:メディアとしての筑紫哲也」の二部構成で、故人のジャーナリストとしての活動をアカデミズムの場で今一度問い返す。(事前予約制)

受賞報告

■第7回竹尾賞
(4月18日表彰式)

「デザインを語ることは不可能なのか」(『文字のデザイン・書体のフシギ』左右社、2008年)により、加島卓助教が第7回竹尾賞(デザイン評論部門、審査員:柏木博)を受賞。これは2008年に書籍や学術雑誌で発表されたデザイン評論記事を対象に審査が行われたもので、4月の竹尾ペーパーショー2009において表彰された。

■2009年日本社会情報学会(JSIS/JASI)合同研究発表大会
(9月12日~13日開催)

・優秀論文賞:藤原正弘(田中秀幸研・D3) 藤原正弘・木村忠正「インターネット利用行動と一般的信頼・不確実性回避との関係」に対し受賞。

・学位論文賞(修士):岡本健志(田中秀幸研・2009.3修士課程修了)「大都市と地方におけるICTの役割:企業立地とアウトソーシングの経済的分析」に対し受賞。

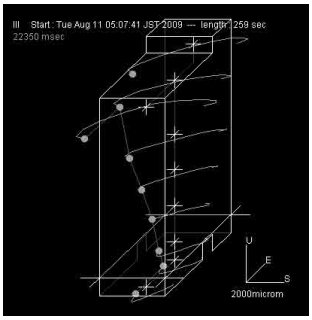
・第10回研究発表賞(2008年合同研究発表大会):岡本健志(前出)が「地域 SNS におけるネットワークの遷移」に対して、趙 章恩(須藤研・M2)が日韓モバイルペイメント普及過程の分析」に対して、木下裕美子(須藤研・D2)が「Knowledge-intensive Services (KIS) and R&D -- Technological Innovation in Service Industry」に対して受賞。

■著作権・著作隣接権公募論文
(9月28日表彰式)

社団法人著作権情報センターが主催する第7回著作権・著作隣接権公募論文で中川譲(馬場研・D4)が、2位に入賞。『「二次創作」とは何か』と題した受賞論文は、「二次創作」という語の普及についての歴史的な分析や、企業がライセンスとして使用した「二次創作」の法的な分析などを行ったもの。

CIDIRからのリポート

情報学環の建物は地震でどのように揺れるのか?



2009年8月11日駿河湾の地震(M6.5)での学環本館の揺れの再現アニメーション[CIDIRホームページでご覧いただけます]

総合防災情報センター(CIDIR)は情報学環本館の10階にあります。最上階のせいかCIDIRにいると、やけに地震の揺れが大きく感じられます。そこで、情報学環の建物にIT強震計を設置して、情報学環の建物がどのように揺れるのかを調べることにしました。

2009年3月から建物内の9カ所にセンサーを設置して観測を開始し、6月6日の千葉県東方沖(M5.9)の地震ではじめて震度1が観測されましたので、さっそく観測記録から建物の揺れを再現してCIDIRのホームページに掲載しました。図は省略しますが、揺れを比較するために地震研の建物の揺れも並べて掲載しています。8月11日の駿河湾(M6.5)の地震では、これまで最大の震度3が観測されました。

これらの記録を見ると、確かにCIDIRのある10階フロアは良く揺れます。震度で比べると地階に比べて1以上大きくなっています。それだけでなく、地階から3階までに比べてそれから上の方がより大きく変形していること、建物上部にねじれ振動があること、などが見えてきました。

ここで使用したIT強震計は、これまでは難しかった地震時の各建物の揺れを、日頃の弱い地震で見られるようにし防災に役立てようというツールです。我々はこれを「建物の聴診器」としてより多くの建物に設置して利用していただくことを目指しています。(総合防災情報研究センター教授・鷹野澄)

人事異動

教員

【採用】

5/16	加島 卓	助教
5/16	佐藤 朝美	助教
8/16	松前 恵環	助教

【昇任】

9/1	越塚 登	教授
9/1	田中 秀幸	教授
9/1	林 香里	教授
9/1	水越 伸	教授

職員

【転入】

7/1	松本 健一	会計係長

(宇宙航空研究開発機構産学連携センター知的財産グループ主査から)

【配置換(転出)】

7/1	藤井 真嗣	

(教育学研究科・教育学部財務・研究支援チーム係長へ)

Book

『技術と時間1—エピメテウスの過失』

ベルナール・スティグレール著 石田英敬監修
西兼志訳 / 法政大学出版局

本書は、現代フランスにおける最も重要な哲学者、ベルナール・スティグレールの主著『技術と時間』シリーズの第一巻である。フーコー、ドゥルーズ、デリダらのポスト・モダンの次の世代がいかなる知を築きうるのか? それを技術という抑圧されたもの、思考されざるものから捉え返すことで、明瞭に提示するのが本書である。

『戦後日本スタディーズ 1-3』

岩崎稔、上野千鶴子、北田暁大、小森陽一、成田龍一編著 / 紀伊國屋書店

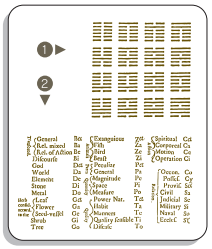
本シリーズは、日本の〈戦後〉を多様な視座から分析し、見落とされてきた論点を救い上げることで、単層化しがちな「戦後論」を複雑化する試みである。1巻では50年代、2巻では60・70年代、3巻では80・90年代を取り上げ、とりわけ社会運動に焦点をあてながら、〈戦後〉を再度検証する。

Cover

表紙モチーフについて

❶表紙右上の図版は、1703年にライプニッツが発表した二進法の研究で参考にした、中国の卦(うらない)の木版。ライプニッツは、卦に割り振られた意味や解釈の問題を捨て、単なる形式的な結合規則や計算の問題だけに注目した。このライプニッツの記数法は、やがてコンピュータ言語の発明につながる始祖だと考えられている。

❷表紙左下の図版は、1668年にジョン・ウィルキンズが発表した人工言語。彼は万物をカテゴリに分類し、その記号の組み合わせでコトバをつくろうとした。実際には、万物を恣意性なく分類するのは不可能だが、今日では、これは世界を厳密な階層で記述する試みではなく、むしろタグやリンクで柔軟に組織されたウェブやハイパーテクストの先駆と考えられている。



協力:阿部卓也(学際情報学府OB)

東京大学大学院情報学環・学際情報学府

address: 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
e-mail: news@iii.u-tokyo.ac.jp
the member of editorial board: 柳原 大・林 香里・前波奈保子・大久保 遼

editor's note:

本年度からニュースレターの編集に携わることになり、すでに秋分を迎える時期となった。本号の表紙モチーフでは、情報伝達の枢をなす言語、記号法について紹介している。ジョン・ウィルキンズの哲学言語とより単純なライプニッツの記数法である。

情報学環の中でも脳科学を専門、あるいは学際領域的に携わっている研究者は数多く、我々の集団の中でも言語についての探求は幅広い。脳におけるニューラルネットワークの中で、最も要となる情報の伝送は活動電位によるが、活動電位による情報の符号化（言い換えるならば言語化）については、その発火率や時間コード（単位時間内の活動電位の時間間隔）、さらにはニューロンの集団的符号化と未だ様々な知見が集積されている段階である。

ところで、このような情報あるいは表象の符号化の多様性は、実は情報学環・学際情報学府では当然で、この混沌とした中に秩序が生まれる様子は時に大変興味深いと私は思う。（Dai）

Interfaculty Initiative in Information Studies
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies
The University of Tokyo

http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/

.27

10. 2009